

今井徹郎
草木歲時記

毎日新聞社

草木歳時記

今井徹郎

毎日新聞社



著者略歴

今井徹郎(いまい てつろう) 1901年、長野県生まれ。23歳の時、山役人を志し、昭和18年に退官するまで17年間各地の山野を歩く。現在は著述に専念。著書に「坪井伊助伝」「山は生きる」「南アルプスと奥秩父」「富士山とその附近」などがある。

草木歳時記

価 四〇〇円

昭和四十年九月二十日 印刷

昭和四十年九月三十日 発行

著者 今井徹郎

発行者 赤木益一郎

印刷所 中央精版印刷

発行所 毎日新聞社

東京都千代田区有楽町
大阪市北区堂島上
北九州市小倉区紺屋町
名古屋市中村区堀内町

©今井徹郎 一九六五年 〈検印省略〉

								目次	
--	--	--	--	--	--	--	--	-----------	--

早春の花木三題	七
アセビと堀辰雄	一六
シラカバとカラマツ	二七
麦ひと筋の青嵐	四二
ハナズオウとスオウ	四九
トクサはもえる	五五
*	
マロニエとトチノキ	六三
アサガオと利休	七六
リラ（ライラック）のみどころ	九六

ムラサキと万葉集

101

クズ葉とヤブガラシ

112

*

若カエデと老カエデ

123

マユミと中勘助

135

リンドウとキキョウ

143

赤く色づく木の実とナンテン

152

ホオの落葉とクリの実

164

ある植物蒐集家の話

171

*

アスナロと井上靖

一八七

生垣を育てる

一九六

古社寺と杉の木

二〇四

ヒノキの粘着性と谷崎潤一郎

二一九

竹と、竹に生涯をかけた人々

二三二

あとがき

二五一

草木歲時記

早春の花木三題

おのづから満ち来る春は野に出でて

我が此の立てる肩にもあるべし

長塚 節

ロウバイ（臘梅）やオウバイ（黃梅）が蕾を開き、サンシュユ（山茱萸）がまた花を咲かせても「春はあけぼの、やうやうしろくなり行く、山ぎはすこしあかりて、むらさきだちたる雲ほそくたなびく」——『枕草子』のそれで、春とは名ばかり、ものの動く気配はまだはるか彼方にある。

ロウバイやオウバイやサンシュユは、きびしい寒さの残るそんな季節、だが、若々しい春の香りを多分にひめた衣を、気忙しくも枝々に明るく飾ってくれる。

おそらく彼女たちは、このほほえましい晴れ姿を「早春」のあいさつに代えて見せてくれるのである。ろうが、他の木々に先がけ、花を開いてくれる好ましい姿には、人間のほうから先に「ご苦労サン」と、慰労と愛撫の言葉を贈りたくなる。

うちなびく春きたるらし山のまの

遠き木ぬれの咲き行く見れば（万葉集巻八）

ロウバイは中国を原産地とするロウバイ科の落葉小灌木だ。このゆえに、またの名をナンキンバイ（南京梅）あるいはカラバイ（唐梅）という。

ロウバイが、才女紫式部や清少納言の目に、いささかもとまらなかったのは『本草啓蒙』によると、両女の没後、すなわち後水尾天皇の時代（一六二一—一六二九）朝鮮を経て渡来したからだ。

ロウバイの名は、臘月（十二月）のころ、梅の花に似る花をかざるものもあるところから生まれたものと、もっぱらいわれている。しかし、この花の莖と弁とが半透明の膜質からなり、白臘でもうつすらとなびいたように、鈍い光沢を浮き出しているところに、この名がおきたともいわれるのとあわせて考えると、ロウバイへの親しさは一段と明るさを増してくる。

このロウバイのよさは、鈍い光沢の花弁を、風もまだ冷たい早春の淡い陽ざしに、軽く浮き出させる、そのもの静かな、ロマンチックな風情のうちにあろう。

臘梅に雀のき啼く日和かな

鳴雪

それだけこの花の色には、非健康的な弱々しさもみられ、アセビ（馬酔木）の花にも似て、胸でも患って床に臥しがちな人の肌を思わせる——堀辰雄の好みそうな「月下に浮かぶ蒼白さ」がなんとなく感じられないでもない。

しかしその反面、水の辺の近くに生を求め、春雨にけむるシダレヤナギ（枝垂柳）の若芽のごとく、この花の集合体がうつすらと淡黄色に映え、幾分苦みのこもるほのかな匂いを、折からの微風にのせ、浅黄色にかすむ大空にただよわす風情には、春の予告の晴々しい使者として、まことに棄て難い味がある。

が、窪田空穂が「しらじらと障子を透す冬の日や室に人なく臘梅の花」と詠じて、春近い冬的一天を深閑とした感慨に託したそのように、きっぱりいて、ロウバイは眺める瞳に、明るい華やかさ

を添える花とはいえない。

清貧の孤独に、より深い潤いを添えてくれる「清冷の花」とでもいふべきであろう。

臘梅のすぎゆく花に立ち添ひて

ここだく芽ぐむみどりをさなさ

鹿兒島寿藏

ところで、本多顯彰は、自宅のロウバイの花が毎春のごとく、棕鳥の荒業に無惨にもうちのめされるので、思いあまり、近ごろよく使われる砒酸塩やBHCなどの農薬を、咲き続ける花弁の上にセツセとふりかけ、棕鳥を撃退しようとしたが、いっこうに効目はなく、棕鳥のなすがままにまかせるほか致し方なかった、という意味のことを、いつか新聞に書いたことがある。

棕鳥の空にまとりおしわたる

柳芽

本多氏のロウバイは、氏の先代が京都の御所に育つ親木から種子を得て、大切に育てたもので、花の香りは早春の庭にふくいくとして漂い、たとえるべきものを知らないと自慢しておられる。

してみると、この非常手段はまことに是非なき業であったかも知れない。が、棕鳥は別としても、かつて人間から、薬物などでいためつけられた経験をもたぬロウバイの侘びた花こそ、とんだ災難を蒙ったものである。

このロウバイが、同じく季節花を黄色に飾るオウバイにくらべ、植木の市場などで比較的高価に取り引きされるのは、本多氏がその香りに魅せられたように、蘭の花の香りを思わせる深い匂いを放つところに、その理由があるのだろう。が、生花の展示会でもわかるように、凡俗の臭味を棄て去った老僧の姿ともとれる樹容全体のもつものさびた趣きが、ロウバイの品位を一段と高めている点も、見

逃がしたくない。

蠟梅や雪うち透かす枝のたけ

竜之介

明の袁中郎は『瓶史』のなかで、ロウバイにスイセン（水仙）を配する取り組みを早春の生花として高く推した。が、袁中郎でなくも、ロウバイとスイセンとの組み合わせは、ロウバイの木振りと清冷な花のさまに、そして、早咲きスイセンの白い純の色と、長葉の徹しきった青さに、心ひかれる人ならば、その絶妙の配置に拍手をおくるにちがいない。

それほど、早春の日のロウバイはスイセンとともに素晴らしい。

ロウバイの香りが身に添ひて年守る

一鳴

ところで、同じ季節に開く早春の花でも、オウバイの花となると、ロウバイの花とはてんでその趣きを異にする。

花ばかりではない。木の風情に至っても、またそうなのである。

オウバイは中国を原産地とするモクセイ科の矮小灌木で、中国では古来「迎春花」として讃え、わが国でもロウバイとあわせ、迎春の姉妹花にみたててきた。

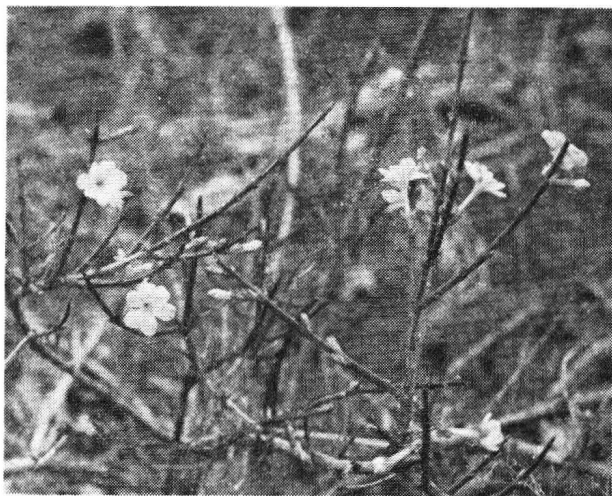
「迎春花」の名は『汝南圃史』に「十二月と春はじめ花を開く、故に迎春の名あり」と見えるところから生まれている。

これというのも、春の訪れる喜びを、いそいそと早目に見せてくれる美しい花だからだ。

迎春花の花咲く賤が垣根かな

陽春

もっとも朱熹の『楚辭集注』によれば、中国で迎春花と呼ぶのは、春もなかばごろ、山腹の傾斜地



漏斗形の黄花をつける繊細なオウバイ

などでひとときわ高い枝梢に、薄桃色の花卉を風に揺らせて咲かすコブシ（辛夷）のことと見え、まったく別の見方をとっている。

しかし、あえて「迎春の花」と名付けるならば、前者のほうがはるかに早く春のいぶきを伝えてくれることはまちがいない。

それにしても、独得の風致と幅の広い気品の花で、花軸を鮮明に装うスイセンは別としても、早春、凍てついた大地を割って、サクラソウに似る淡紅色の五弁花をしおらしく飾るユキワリソウ（雪割草）や、目覚める黄金色の明るさで一陽来復の悦びを告げるフクジュソウ（福寿草）が、迎春の姉妹花としてとりあげられなかったことは、不思議といえは不思議である。

さて、オウバイの名は、梅の花を思わす楚々としたいでたちで、黄色の花を咲かすまから生まれたものであるが、花のかたちはむしろモクセイ科のレンギョウ（連翹）のそれに近い。

そして句には「迎春花や鶯の羽のうつりけむ」ともあるが、花を染める色彩の鮮度は、この句の表現

よりはるかに強くて濃い。

黄梅や夜空あかるき雨の音

如翠

オウバイが一月の末ごろから「如月」きさらぎの名にふさわしい二月の候にかけ、六裂する漏斗形じょうとうけいの花を前年の古枝につけるさまは、この木の一つの特徴とみている。

このオウバイが、エニシダのように、葉緑素を深々とたたえて、見るからに真青な、そして、要所に節をもつ細枝を、レンギョウのように下向き加減に垂らす風趣、そのなよなよと見える特異の風情をとらえて、細枝二、三条をとり、それに薄花色のツバキ（椿）一輪を低く添え、花器に活かしてみよう。

すると、軽く垂れる青色の細枝は、その細枝にまばらにつく単純な黄花の姿とは別に、一輪の薄紅のツバキの花を上から大きく愛撫する。そして、ほのぼのともえあがる繊細な感情を、いつのまにか脈々となみ打つ動的なものに変えてゆく。

漢名に見る「金腰帶」の呼名なども、このさまを如実に写したものといえよう。

しかし正直なところ、花そのものについていえば、早春、霜に抗して花を開くという以外、これを高く推す理由を私は見出し難い。

レンギョウの花を思わす強い色彩の鮮度を、この花はもつにしても、花の生命ともいうべき匂いを、潤いを、甘さを、欠くからだ。

高松宮ご所有のオウバイは、オウバイの盆栽としてはまさしく絶品に近いものであり、私自身もほればれとしてみられたことがある。もっとも、これを同型の他の盆栽品、ザクロ（石榴）、ボケ（木瓜）、

ハナカイドウ（花海棠）などの花木にくらべると、樹容全体の風格に、なんとなく甘さのびまんと、ある種の弱々しさが感じられたのは、この木本来の性質上やむを得ないことであろう。

しかし、それでいいではないか。所詮、どの木もみな一つの存在として、それぞれさだめられたいのちの中で、悦びを抱きつつ生きているからだ。

ところで、この種の盆栽には「芽摘み」が何よりも大切であり、また忘れてはならないことである。

これをオウバイの場合についていえば、新芽の長さが二〇センチほどに伸びた時、基部の二、三節だけを残し、残余は切りとおかぬと、くる年ごとに盆栽としての価値を減少してゆく。

所詮、オウバイという灌木は、野生的に庭などに育て、その明るい黄なる色に、早春の楽しみを託す木なのであらう。

とかく背中をこごめて街を歩きたがるのが私のわるいくせだ。そんな折、胸を張って歩きなよと、早春の微風が軽く頬にささやいてくれる。

この季節、サンシュユもまた前掲の木々におくれまじと、葉のもえ出るのに先だって、花を開いてくれる。それがまた、黄色なのである。

枝ながら黄に揺れてをり谷のしも

遠く眼立つは山茱萸の花か

鹿児島寿藏

サンシュユは朝鮮、中国を原産地とするミズキ科の落葉小喬木で、中国では「野春桂」と呼んでい

るが、花の咲くさまから見て「雞足」だの「鼠天」など、ちょっと異様に聞こえる名もある。このサンシユは、花卉と同数の雄蕊おしべと、一―四個の結合した心皮からなる雌蕊めしべを抱き合わせて、花の集合体をつくるところに、かわった味を持っている。

サンシユに山茱萸とむつかしい文字を充てたのは、ざっとこうである。

「茱萸」という漢字はグミ（胡頹）のことだが、グミとサンシユとは同じものでない。グミはグミ科の落葉性低木である。

しかし、サンシユの漿果しょうかが紅色にいろづくと、その形といい、大きさといい、タワラグミに似ているところから、山に育つグミによく似た木として、山茱萸の文字が充てられたのである。

『本草綱目』によると、サンシユは享保年間（二七一六―一七三五）わが国に渡来したと見えるが、『本草和名』に「加利波乃美」と記されている点から判断すると、当初はカリハノミの一つとして呼ばれていたのではあるまいか。

加利波乃美は「枯葉の実」のことで、多くの広葉樹が葉を散らすころ、霜にうたれて実の赤く熟するものに、漠然と与えた総称である。

この季節に赤く実をいろどるものにはこのサンシユのほか、サワグミ、アキグミ、ヤマグミなど、グミ科の落葉低木がある。したがって、サンシユだけが加利波乃美と呼ばれたわけでもなく、グミにも夏のころあい、紅に実を染めるナワシログミやナツグミもある。

だから、民部卿為家が「小山田の苗代ぐみの春過ぎて我身のいろに出でにけるかな」と詠んだ一首は、サンシユの実を指してのことではないかと誤認している人もあるが、いろづく季節の配列から